

放射線技師への教育に期待

がん社会 を診る

中川 恵一

私は市民セミナーや学生講義を大切にしています。がんリテラシーの向上は、予防と早期発見に大いに役立つだけでなく、治療の選択肢を理解し、自分に合った治療法を選ぶためにも重要です。

学生向けには東大医学部での学生教育のほか、阪大の招へい教授として放射線の人体影響をテーマに毎年、オンライン授業をしています。獨協医科大学では特任教授の称号を頂き、2024年4月はじめに医学生向けに「がん治療

の臨床から健康教育、そして公衆衛生」という壮大なテーマで講義を行いました。直近では4月末、東京都立大学で診療放射線技師(以下、技師)をを目指す若い学生たちに、がんに関する基礎知識と医療者としての心得などについて講義を行いました。

多くの難病とちがひ、がんは知識や行動で克服できる病気といえます。特にがんに関するリテラシーは若い頃に身につけることが大切です。

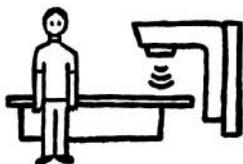


イラスト 中村 久美

残念ながら、日本人のヘルスリテラシーは世界最低レベルです。技師養成課程のカリキュラムにさえ、がんリテラシーを高めるための教育はほとんどありません。

放射線治療は、手術や薬物療法とともにがん治療の三本柱の一つです。技術の進歩により、放射線を患部にピンポイントで集中させる「定位放射線治療」が普及しつつあります。

東大病院では、手術ができないほど進行した前立腺がんも5回の通院治療ですみます。ただ、平日毎日、2ヶ月近く通院するケースもまれではありません。

放射線治療では私のような放射線治療医の他、看護師、医学物理士、診療放射線技師などがチームを組んで患者の治療に当たります。なかでも放射線治療を担当する技師

は、毎日患者に接しながら正確な位置決めを行い、治療装置のスイッチを押す重責を担います。

1回の照射量は千ミリシーベルトを超えますから、ミスは許されません。高度な技術と知識を持つことはもちろん、患者とのコミュニケーションを通じて信頼関係を築き、がんに関する正しい情報を提供することも求められます。

都立大の講義後に実施したアンケートによると、がんについての知識面のほか、技師としての役割の自覚の点でも改善がみられました。回答者全員が講義に満足しており、誤解が解消できた、放射線治療に関心を持った、などの声が多数きかれました。

放射線治療を担当する技師のレベルアップと地位向上が、日本のがん治療の底上げに必要だと思います。そして彼らにも、学校でのがん教育に積極的に関与してもらいたいと願っています。

(東京大学特任教授)